

Egypt

【エジプト】

文・写真＝鈴木 革(写真家)

砂漠の水害

秘境シーワに忍び寄る危機



G



F



E

- A. 乾燥したナツメヤシの果実
- B. 朝日に染まるシーワ。ヤシの木が辺り一面に広がり、西の湖の向こうには果てしない砂漠が続く
- C. イスラムの人々はとにかく子どもをかわいがる
- D. アメン神託所。頑丈な造りは2000年の時を経てなお健在で、当時の富の集中がうかがえる
- E. シーワではロバの馬車が輸送の主役。観光タクシーのロバがなぜか怒っていた
- F. 物心がついた時からロバの扱いはなれたもの。少年はすでにベテラン級
- G. 日中は日差しが強いが、日陰は涼しくて快適。昼寝が一番
- H. 中心街の市場付近。丘上はシャーリーと呼ばれる旧市街跡



A



B

観光大国エジプト。最後の秘境といわれるシーワ・オアシスは、リビア国境近く、サハラ砂漠※1の真ん中にある。カイロから約800キロの道はほとんどが不毛な土漠で、リビアにつながる地中海沿岸道を離れて南下すると、そこにはまるで生命感のない大地と空だけの空間が広がる。まさに陸の孤島というイメージだが、実は砂漠交易の中継地として紀

元前から栄えた歴史がある。中でも紀元前331年に、マケドニア王アレクサンドロスがアジア大東征の成否を占うために訪れたアメン神託所※2は、ギリシャ世界にも知れた有名な聖地であり、今も当時の面影を残し、丘からオアシスを見下ろしている。シーワは東西に50キロほど。古来ベルベル人※3が暮らし、オアシスというよりサハラの一地方といった感がある。付近には大小の塩湖がいくつもあり、町を中心に村落が点在する。また、広大なナツメヤシの緑地に覆われており、その果実は薬効があるといわれ、特産品として貴重な収入源となっている。あいにく、いつも収穫期を外し、忙しく働く人々に出会えてはいない。勝手な想像だが、いつ訪れようともわれわれの知る忙しい日常などとは無縁なのだろう。動いているものといえば、砂ほこりを巻き上げ行き交うロバの馬車や砂まみれのやんちゃ坊主ぐらいで、ゆっくりとした時間が流れている。



H

※1 この付近はリビア砂漠とも呼ばれる。
 ※2 古代エジプトの最高神アメンのお告げがくだる場所。アモン、アンモン神ともいわれる。古代ギリシャではゼウスと同一に考えられており、シーワの神託は精度の高さで有名であった。アレクサンドロスは自らをゼウスの子孫と考え、その確認と大東征の成否を占うべく砂漠を越えて訪れた。
 ※3 先史時代から、北・西アフリカ、サハラ砂漠にかけて暮らす人々で、独特のベルベル諸語を話す。



D



C



J



L



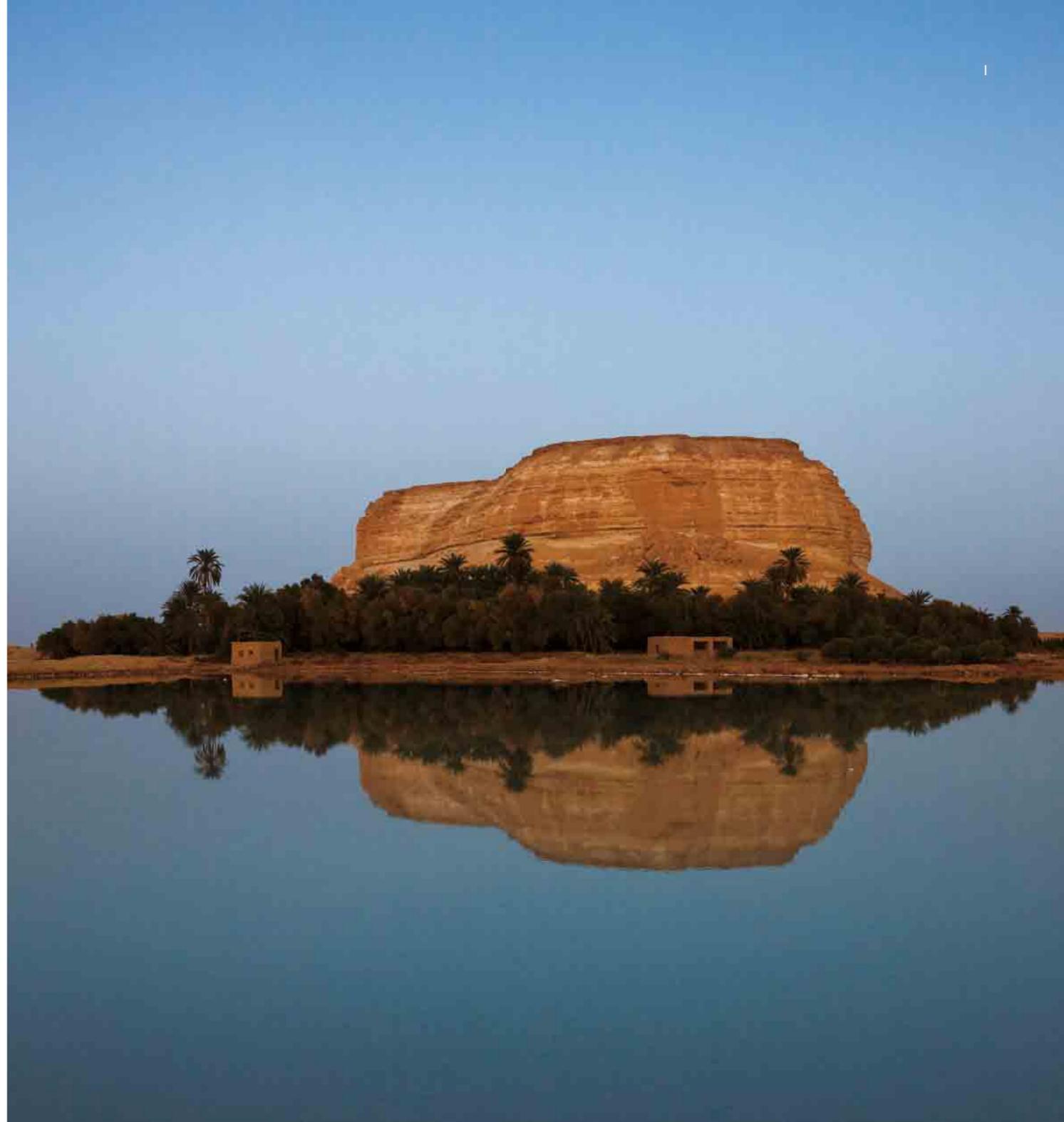
K



M

地球ギャラリー vol.08

- I. エコ・ツーリズム・ホテルから望む西の湖と夕映えの岩山、通称ホワイトマウンテン
- J. 立ち枯れたヤシ。オアシスの所々にこのような風景が見られる
- K. 動力ポンプによる湖への排水。この日、ひどい砂嵐に空気がよどむ
- L. 西の湖で水路沿いの土手の工事をする作業員
- M. 中心街近く、「クレオパトラの泉」と呼ばれる天然泉は美しい観光スポット



こんなシーワに、今、とんでもない危機が迫っている。

太古は海底だったという一帯は、海抜がマイナス30メートルという低地。それゆえ地下水にも恵まれ、コバルト・ブルーやエメラルド・グリーンの美しい天然泉が点在し、また人工井戸からは水が勢いよく噴出している。

近年シーワは、観光や農業開発を背景に人口が急増して、かつて3500人ほどだった人口は、現在では数万人ほどに膨れ上がったという。これが無秩序な井戸の掘削を招き、行き場のない水が次第にオアシスを浸食しつつある。現在、水路を引いて中心街の西に接する湖に排水しているが、湖は拡大する一方だ。そもそもこの湖自体が、排水によって出現した新湖であるというから驚く。悪いことに、淡水だった地下水は地面の塩分を吸収し、高濃度の塩湖となって緑地帯をむしばみ、立ち枯れたヤシが目立つ。

砂漠の水害。岩山を映して広がる青い湖が、その美しさとは裏腹に人々の生活を脅かしている。近ごろ、この美しい湖の風景を売りにする高級なエコ・ツーリズム・ホテルが営業を始め、なんとも複雑な思いである。



2011年の完成を目指し、建設が始まった新博物館「大エジプト博物館」の完成予想図

カイロ大学医学部で医療技術を学ぶイラク人医師や看護師



JICAの活動 in エジプト

持続的な成長と地域の安定のために

中東和平への取り組みや経済成長で存在感を増すエジプト。JICAの支援のもと、持続的な成長を目指すとともに、地域全体の安定に向けた取り組みを推進する。

近年、中東和平の実現やアフリカの安定に重要な役割を果たしているエジプト。かつての社会主義経済から、市場経済体制・民主化への移行が進み、海外からの投資も増えている。だがその裏で、人口増加による高い失業率、貧富の差の拡大といった課題も残る。JICAでは、「持続的な成長と雇用創出」「貧困削減と生活水準の向上」「地域安定化の促進」などを重点分野に、積極的な支援を展開している。

観光が主要産業の一つであるエジプトは、古代文明の貴重な歴史的遺産の宝庫として知られる。しかし、遺物の多くが公開されるカイロの考古学博物館は、老朽化が進み収蔵スぺー

スも限界に達している。そこでJICAは、ギザのピラミッド周辺地区に、総敷地面積約50万平方キロの新博物館を建設するための円借款を供与。また、併設される保存修復センターでは、文化財の管理や保存修復技術の移転、データベースの作成などを支援。新博物館の建設と歴史的遺産の保護を通じ、さらなる観光産業の発展と雇用の創出を目指している。

紅海沿岸ザファラーナ地区では、増え続ける電力需要に対応するため、円借款を活用し120メガワットの風力発電施設を建設中だ。環境保全と電力の安定供給を両立させることで、エジプトの持続的な成長を目指す。この取り組みは、クリーン開発メカニズム

(CDM)※の適用も認められている。また、地域の安定化に向けた取り組みとして、復興を目指すイラクの医師や看護師をエジプトのカイロ大学医学部などに受け入れ、医療技術を指導する第三国研修を実施している。

※温室効果ガスの排出量を削減するための事業を先進国が開発途上国と共同で実施し、その削減分の一部を先進国の削減分として充当できる制度。



風力発電の盛んなザファラーナ地区。JICAはエジプト最大規模の風力発電施設の建設を支援

ギザの高地にそびえ立つ三大ピラミッド。クフ王が建てたものには、重さ2.5トンの石灰岩ブロックが約230万個使われている。

エジプト文明をよそぐんだ悠々のナイル川。伝統的帆船「ファルカ」が、今でも観光船や交通手段に使われている。



若きファラオ、ツタンカーメンの黄金のマスク。1922年、歴代の王が眠る岩窟墓「王家の谷」で見つかった。



水生植物の繊維から作る「パピルス紙」が生まれたのは約5000年前のこと。古文書の数々が記され、今日に伝わってきた。



首都：カイロ
面積：100万km²(日本の約2.6倍)
人口：約7,257万人(2006年)
公用語：アラビア語
宗教：イスラム教、キリスト教
1人当たり国民総所得(GNI)：1,350ドル(06年)
経路：日本からカイロまで直行便で約13時間
通貨：エジプトポンド(LE) 1LE=約18円(09年4月現在)
気候：地中海沿岸の地中海性気候、カイロ周辺の半乾燥気候、砂漠地帯の砂漠気候などに分かれ、5~10月の夏季と、11~4月までの比較的温暖な冬季がある。カイロ以南はほとんど雨が降らず、夏季には最高気温が40度を超えることも。



エジプト料理 庶民の定番メニュー「コシャリ」



紀元前3000年にはすでに中央集権国家が成立し、さまざまな文明を築いてきた歴史の国、エジプト。悠久の時を経て、この地ならではの食文化が今も残る。何といってもエジプトは食材に恵まれている。ナイル川沿いの肥沃な大地で育つ野菜は味が良く、ナイル川や紅海、地中海で捕れる魚も新鮮だ。ハトやヒッジといった肉類やタンパク源となる豆なども欠かせない。味付けにスパイスを使うが、あくまでも素材の味を生かした料理が多い。

マカロニ、カットしたスパゲティ、ご飯、レンズ豆、ヒヨコ豆に、トマトソースと揚げた玉ねぎをかけ、よく混ぜて食べる「コシャリ」はエジプトの庶民の味。町の屋台などで安く気軽に口にできるまさに「エジプト版ファストフード」。口の中さまざまな食感が、食べる人を楽しませてくれる。

エジプト発祥の野菜、モロヘイヤを使ったスープは、葉を30分近くも刻み続けて粘りを出し、ガリックと一緒になキンスープに入れ弱火で煮込んだ栄養たっぷりの一品。臭みもなくマイルドな味わいだ。

東京・四ツ谷の「エル・サラヤ」は、エジプト人シェフが腕を振るう、日本では貴重な本格エジプト料理の店として、4年前にオープン。現地で親しまれる水タバコが体験できるほか、週3回行われているベリーダンスショーも楽しめる。



エル・サラヤ
〒160-0003 東京都新宿区三栄町1 堀内ビル1F
TEL:03-3353-9394
URL: http://el-saraya.web.infoseek.co.jp/
ランチ:11時半~14時(祝日は除く)
ディナー:18時~23時(日曜定休)